

●シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦

シベリア回想五人の兵

シベリア回想五人の兵

山口県 長野 安 廣

大正十三（一九二四）年生まれの私達が徴兵検査に合格し、山口四二連隊に入営したのが昭和十九（一九四四）年十二月十日だった。当時日本は南も北も八方塞がり、遠からず手を上げるだろうという寸前だった。

私は、昭和十六年三月より陸軍御用船舶葉丸三三〇〇トンに乗船、南はラバウル、北は占守島まで行ったり来たり。学歴のない私にでも日本のこれから辿るであろう末路はおぼろげながら推測できた。それは敗戦だった。昔から、勝てば官軍、負ければ賊軍という言葉の通り、喧嘩の相場は決まっていた。時の要人達は知り抜いていた事実だったろうに、引くに引けなかったのだらうか。

さて話は元に戻る。山口に入営後十日目、明朝頃出発らしいと前夜、点呼の週番将校が言った。「長野はおるか」「ハイ自分でありませう」、呼ばれて近寄ると、小声で「お前のお袋が馬小屋のうしろに來ているから会つて來い、歩哨に見つかるなよ」とのことだった。「ハイ有難うございます」。班長の許可を得ると馬小屋へ一目散、暗闇の中、鉄条網越しに姉と二人のシルエットが見えた。歩哨がい

ないのを確かめると、小声で「ヨイ」と声を掛けた。母は「安ちゃんか」返事が返った。「今夜立つのか、何時頃」、私は言葉に窮した。「それは分からない」「元気でやりまいの」、短い会話だった。姉が投げてよこしたタバコをポケットにねじ込むと後も見ずに駆け戻った。その母もこの世から消えてもう三十年になる。

その夜更け「非常呼集」の命が出たのだった。今夜あたりだろうと予測していた兵達に動揺はなかった。

完全武装した兵達は黙々と営庭に集合した。隊長の短い訓話の後、山口四二連隊の衛門を後にしたのは昭和十九年十二月二十日午前二時だった。入営後、親子の面会は一度もさせなかった。

衛門を出て驚いた。門前の沿道には、息子の名前や夫の名前、友人、愛人の名前を書いた大提灯に小提灯、大きな幟^{のぼり}まで持ち出し、必死に呼ぶ我が子、我が夫。山口の街は盆を引つ繰り返したような大騒動、阿鼻叫喚^{あびきようかん}とはこんなことだろうか。息子達は母親の声を聞き分けていただろうが、隊列を離れることは許されなかった。何百人もの同じ服装に同じような年格好では、親でも見分けはつかなかった。しかも夜なのだから。

ちやうど山口駅前に来た時だった、多くの声に混じって「安ちゃん、安ちゃん」と必死に呼んでいる声を耳にした。あれはお袋だとすぐ判った。ちやうど乗車待ちだったので、班長の許可をもらった。母と姉は改札口近くにいた。「ヨイ」と一言、突然目の前に現れた息子にびっくり。溢^{あふ}れる涙を押さ

えながら、「体を大事にしまいや、元気でやりまいや」、ほんの一言の短い会話だった。「じゃー行ってくるで!!」、落ちそうになる涙をこらえて暗闇を駆け戻った。

下関までの時間は短かった。関釜連絡船に乗るまでの長い長い通路、妻と別れを惜しんでいるのは色白の中村君。棧橋に横付けになっている連絡船の手摺りにもたれシクシク泣きながら別れを惜しんでいるのは召集兵の中野君。産み月の大きなお腹を抱え、おかっぱ頭の彼女、手摺りの両脇には銃剣を構えた憲兵、あの情景は今も脳裏に焼きついている。この中野君、中支（中国中部）より行軍中に還らぬ人となってしまった。

若い兵を積み込んだ連絡船、汽笛もあげず大時化の玄界灘へと旅立つて行った。船酔いでトイレにゲーゲーやるものだから排水パイプが詰まり、足の踏み場もない有様だった。元氣だったのは元船員の私を入れて数人、お蔭で寒い甲板に人の三倍も対潜監視に立たされてしまった。何が災いするやら釜山に入港すると途端に元氣を取り戻した兵達、待ち受けていた列車に積み込まれた。これは貨車ではなく客車だった。行き先は南京とのこと。やがて南京に到着した一行は、南京城外のワキコンスという所にある空襲でボロボロになった四階建ての貨物倉庫が宿舎にあてがわれた。床は土ぼこりが舞う程、箒もないまま掃除もしないで、その上にマットを敷いて寝起きた。朝起きると顔や鼻の穴まで真っ黒、笑うこともできなかった。

朝飯が済んだ頃には五〇キロ爆弾を満載したアメリカの定期便B 29が五機、所かまわず爆弾をバラ

撒いて行く。我々はクリークの土手に寝ころんでただ見ているだけ。射程距離七〇〇メートルに達する高射砲は日本にはなかった。幾ら地団太踏んで悔しがっても仕方のない事実だった。

こんな生活の繰り返しの中に軍の方針が決まったのか、中支の奥地にいる藤部隊の本隊に合流する先発隊と残留組との二手に分かれた。

これから藤の本隊と一緒に、満州の四平街^{シヤンガイ}でさよならすることになる。有吉、石田、太田、村の四君も先発隊に入っていたのだが、この時点ではまだ別々の小隊だった。

先発隊に入った私達初年兵、藤六八六部隊、二三三連隊第三中隊要員となっていた。残留組に別れを告げ、南京を徒歩で出発したのは昭和二十年一月上旬だった。走る汽車もなかったのか、漢口^{カンコウ}まで一カ月余りの行軍だった。入営以来、対向ビンタをやらされる位で一期の検閲も済んでいない初年兵ばかり、千人余りの集団だった。

我々の小隊長は中支の奥地から初年兵受領に来ている大内軍曹。この大隊の総指揮官は、これも同じく中支からやって来たチョボ髭^{ひげ}の伊藤准尉、分隊の纏め役^{まとめ}は下士候の田中君だった。各自に支給された小銃は九九式歩兵銃、三八式より銃身が短く、自殺するのに都合がよかった。

さて行軍の一日の「ノルマ」は四十キロ位だった。アメリカの双胴の戦闘機ロッキードがちよくちよく飛んで来ては二二ミリ機関砲をブチまけて行つた。我々は高粱畑^{コウリヤン}へ逃げ込むしか手はなかった。この弾に当たると腕でも足でもフツ飛んでしまう。

一番問題だったのは、我々の分隊に朝鮮出身者の伊君が編入されたことだった。分隊の者が肉刺^{まめ}を拵^{こしら}えて歩けなくなっても見向きもせず、誰とも絶対口を利かなかった。話し相手もない、唯一人だったから無理からぬことではあったが。

この伊君も悲鳴をあげる時がやって来るのである。道中一人の自殺者も出ず、一カ月余りかかって一行は目的地の漢口^{カシコウ}に辿^{たど}り着いたのだった。

さて、ここ漢口^{カシコウ}の兵站部^{へいたんぶ}は関東軍の支配下だった。その昔、関東軍と藤部隊の兵達が中国の奥地で機関銃まで持ち出し大喧嘩をやらかしたらしく、犬猿の仲だった。藤の初年兵は、㊦のマークを胸につけていた。関東軍曰く「㊦の初年兵には飯を食わすな!!」という申し継ぎがあったようで、江戸の仇を長崎で取られていたのだろうか？

「漢口^{カシコウ}の殺人給与」と言えば知らぬ者はいなかった。何しろ一食の飯が飯盒の中蓋にすり切り一杯、タクアンが一切れ。内地から後生大事に持つて来た時計、万年筆、目ぼしいものは全部饅頭に化けてしまった。用心しないと、この饅頭にも砒素^{ひそ}が入れてあった。

やがて都合がついたのか、貨物列車で孝感^{コウカン}に連れて行かれ、奥地の宜昌に向けて行軍が始まった。悲劇はこの時に起きたのだった。大男の半島壮丁伊君が足に肉刺^{まめ}を拵^{こしら}えて歩けなくなってしまったのだ。痛さに堪え兼ねた伊は小声で「アイゴーアイゴー」と泣き出したのだった。常日頃、分隊の戦友が困っている時には見向きもしなかった彼、分隊員達は皆知らぬ顔をした。でもそうしたものではな

い、決心した私は彼の背囊はいのうを背負つて二時間近く歩いてやった。彼は有難うとも言わなかった。でも泣かなくなつたのは確かだった。

明日は宣昌という所まで来た時、転属命令が出て孝感コウカンへ引き返すことになった。「命令とは言いながらヤレヤレ」と感じたのは私だけではなかった。

さて、孝感コウカンでは連隊砲教育を命じられた。教官は藤井少尉、彼の十八番は分解搬送だった。砲身は百キロ近くあった。彼の持っているのは標管という鉄のパイプ、遅いと言つてはコツン、駆け足と言つてはコツン、班内に帰つてみると大概五、六個の瘤こぶがあった。藤の本隊が下がる前になつていきなり擲弾筒教育に回されたのだった。大きな大砲相手から小さな玩具のような鉄パイプ製の擲弾筒てきだんとうには面食らつた。孝感コウカンの広い飛行場、隅から隅まで匍匐訓練で這いずり回つた。半袖に半ズボン姿で、左肘に左膝は皮がむけて血まみれ、それが毎日だった。ヨードチンキなど気の利いたものはなかった。

さて一期の検閲が終わり、星が二つになった頃、藤の本隊が宣昌の山奥から下がつて来た。

私は第三中隊、金子中隊指揮班に編入され、ここでこれから苦楽を共にする四君、有吉、太田、石田、中村と一緒になつたのだった。同じ初年兵同士という気易さもあつた。初年兵は各小隊に配属され孝感コウカンの教育中隊は解散。初年兵には各中隊毎に持っている余分な弾薬が各自に配給された。小銃弾三百発、手榴弾五発、擲弾筒榴弾三発。軍足三本に米、一本に一升入つた。もう身動きならぬ装備だった。この孝感コウカンを夜陰に乘じ密かに旅立つたのが昭和二十年六月十二日、中支の山猿と言われた藤

第二三一、二三二、二三三連隊の面々だった。これから一カ月余り続いた夜行軍、もう雨季に入っていたが、雨も降らず静かな出発だった。

この我々の中隊長金子中尉は、陸士出の剣道三段、柔道四段、空手三段という武芸者、猛者^{もき}だった。この中隊長、浪花節^{なにわがし}が好きで、私をよく可愛がつてくれた。この中隊には芸のできる兵がいなかった。私はラジオで覚えた浪花節^{なにわがし}の物真似が少しできたので、中隊長は事あるごとに「長野やれ」と命令された。いやとは言えなかった。酒も飲まされた。これが古兵達の恨みを買ひ、シベリアまで持ち越されることになるうとは、神ならぬ身の知る由もなかった。一番妬^{ねた}んでいたのが同じ中隊の上等兵、彼は吃音^{きつおん}で三年兵だった。私が栄養失調になり段々動けなくなる頃を狙って、徹底的に苛^{いじ}め抜かれた。

この夜行軍、四十五分歩いて十五分の休憩、これが次の宿泊地に着くまで。また四日歩いては一日の大休止、一カ月余りの夜行軍はこのパターンで実施された。北支に入って夜行軍も終わりに近づきつつある頃だった。金子中隊のある上等兵が逃亡したのは十五分の休憩が終わって初めて判った。背^{はい}囊^{のう}はそのまま、小銃だけ持って逃げる気だったのか、連れ去られたのか。小銃の弾込めをし、三人一組になって支那（中国）人達の民家、高粱畑^{コウリヤン}を探し回った。この夜から五人の初年兵の悲劇が始まったのだった。

誰かが言った、「喉が乾いたのう」。ちやうど民家の庭先に井戸があった。誰かが手探りで飯盒を紐で吊して汲み上げた。ちやうど居合わせた五人がこれを飲んだのだった。タブーである。「生水は飲

むな」古兵達の戒めを五人とも完全に忘れていた。夜が明けて井戸水を見た五人「しまった!」何と井戸水は石灰を溶いたように真つ白だった。青くなつた五人、だがもう手後れだった。下痢が始まつたのは翌日からだった。話によれば、この地方は全部石灰岩とのこと、下痢が始まるとみるみるうちに衰弱して青菜に塩だった。葉は正露丸しかなかった。

五人とも、長い行軍の疲れで体力も限界に来ていたのか下痢は止まらなかつた。酒井軍医の投薬は生のニンニクがたつた一切れだった。もう浪花節^{ななわぶし}どころではなかつた。黙々と歩く真つ暗闇の中、突然「ドカン」と銃声が起こつた。大概初年兵の自殺だった。小銃の銃口を喉に、足の親指で引き金を押さえるのだが、確実にあの世へ旅立つことができたのだった。下痢や古兵のビンタに耐え切れなかつたのか、この行軍中に四件位発生した。下痢と栄養失調で苦しんでいたのは我々五人だけではなかつたようだ。

黄河に架かつた長い長い木製の橋、下を見るとドロドロとした粘つこい濁流が渦巻いていた。この黄河を渡り切ると、苦難の夜行軍も終わりを告げた。新郷^{シンキョウ}という駅より旧満州の四平街^{ヘイガイ}まで汽車の旅だった。

四平街^{ヘイガイ}の広い公園で幕舎生活が始まつた。近所の子供達が物珍し気に寄つて来た。これを見つけた満鉄の奥さん連中、顔色を変えて大声で叱つた。「日本の兵隊に近寄つては駄目!! 虱^{しらみ}が移る!!」だと。殺虫剤もなく、二月近く行水ばかりでは虱^{しらみ}も湧^わこうというもの、部隊全員の兵^{へい}が虱^{しらみ}を背負つてい

たのだ。馬鹿にするなと怒ってみたところで、どうにもならない事実だった。

この幕舎生活も四〇五日、ソ連軍侵入の報により、五〇キロ以上離れた戦車隊の兵舎へ移動ということになった。幕舎はそのまま、朝食を終えると部隊は移動を開始した。昼飯抜きの、途中一回休憩のみ、夕方五時までの急行軍だった。

五人の初年兵、互いに励ましながら、体力を振り絞って古兵達に遅れじと付いて行つた。もう気力だけだった。夕方兵舎に着き装具を外すと、直ちにトーチカ造りに取りかかった。古兵達は元気だった。弱り切っている私達はスコップを踏み込む力もなかった。古兵達にピンタを食らっても五人とも全く動く気力はなかった。明くる日から全員総掛かりの塹壕掘り、トーチカ造りの明け暮れが始まった。八〇パーセント位完成した、運命の日、八月十五日の昼前だった。

畑にできたキュウリを袋に通りがかった中年の人曰く、「アンタ達、もうそんな馬鹿なことはやめなさい」「ナニッー」古兵達は息巻いた。「今日戦争は終わったのですよ、さっきラジオで放送がありましたよ、これから私達はどのようなか判りません」、中年の人はそう告げると、肩を落として去って行つた。全員スコップを投げ出し、へなへなと座り込んだ。とうとう来るものが来たという感じだった。やがて集合ラッパが鳴り、日本の敗戦が告げられた。

その日、金子中隊長より命令が出た。全員、弾薬と携行食だけの軽装備で出勤命令を待て、のとことだった。牛蒡剣はヤスリで研いだ。班長が「長野は連れて行く」と言われた時は嬉しかった。古兵

のビンタ、連日の下痢に骨と皮になりつつ、我が身を持て余していた時だったからでもある。

中隊長はソ連軍に殴り込みをかける腹だったらしい。銃を抱いて一晚まんじりとしなかった兵に出動命令は出なかった。大隊長に説得されなかった。

翌日、ロシア側の要求により五キロ以上離れている台上に移動せよとのこと。しかも二十四時間以内と時間が切られた。ここでまた幕舎生活が始まり、武装解除、四平街飛行場の格納庫へ兵器返納。

菊の紋が刻印してある陛下から賜った小銃を粗末にしたと言つてはブン殴られた因縁のこの小銃、腹いせに格納庫のコンクリートの上に叩きつけた。私だけではなかった。何千丁という数だった。こうなるとただのスクラップだった。兵器返納が終わると病兵の診断が始まった。殆どが初年兵、下痢による栄養失調だった。私達五人の初年兵も診断を受けた。待合室で中隊の違う同級生松野君に出逢った。彼も栄養失調だった。診断した連隊の酒井軍医に、松野君を含め有吉、石田、太田、中村、五人は四平街の陸軍病院に入院と決まり、私だけが残された。「何故」、私は軍医を恨んだ。この体でシベリアに連行されたら恐らく生還は叶うまい、涙も出なかった。だが運命の神は私を見捨てなかった。松野君も、有吉君達四人も還らぬ人となつてしまったのだ。後の話によれば、満人達の暴動により医薬品をはじめ糧秣全部がなくなり、恐らく餓死ではないかとのことだった。冥福を祈るのみ。

慌ただしいうちにもう九月になった。ある日ソ連の将校が来訪、ソ連に持ち込む装具の点検があり、大隊の編成が発表され、私は第六大隊になっていた。長の付く者は全部尉官級で、将官級は一人もい

なかった。上層部では事前にソ連側と下話ができていたのだろうか、何も知らないのは兵ばかりだったようだ。

第六大隊の編成千五百人、大隊長岡本大尉という具合だった。

話は変わってちよつとソ連の戦車について話してみたい。四平街シヘイガイの駅に集結した兵の目前に停車した六〇トン無蓋車むがいしゃ、載っていたのは大きな戦車が一台だった。砲口は二〇〇ミリ近くあり、前面の装甲板は六〇〇ミリあるとのことだった。日本の戦車と比較すると、本物と玩具の感があった。ノモンハンではこんな大きな戦車を相手によくぞ戦ったものではある。「盲蛇めくらへびに怖おじず」か。

六大隊の兵員列車は瓊瑤アイジンという駅に着いた。巨大な河アムール、川霧に遙はるかに霞むソ連領「ブラゴエシチエンスク」、兵達は固唾かたずを呑んだ。皆同じ思いだっただろう。ひと抱えもある丸太で組んだ筏いかだの順番待ちをしている間、私はとある一軒の空き家に入った。目的は別になかった。大きな民家で部屋数もかなりのもの、奥の方でガサゴソ音がして、ロシア兵とバツタリ、サツと顔色を変えた彼、素早く腰の拳銃を抜いた。二メートルの至近距離、その手は震えていた。こいつ引き金を引くだろうか、私はじいっと相手の眼を睨にらんでいた。こちらが丸腰だと分かると、身体検査をして、ピストルを収めた。あの時は最後かと思った。

大きな筏いかだで兵はもちろん、中支からの馬三頭、トヨタの二トントラック一台も運んだ。ブラゴエシチエンスク駅にはまだ列車は未到着。簡易幕舎が張られた。この時だった、一天にわかに掻かき曇り、

雷鳴が轟いたその時「ドッ」とばかりに落ちてきた。それは雹だった。特大はピンポン玉大、直撃を受けた兵は瘤だらけ、瞬間の出来事だった。啞然として灰色の空を見上げる兵、これが出迎えの挨拶だった。畑にはあちこちに冬瓜が転がっていた。私はこんな寒い所でもできるのかと驚いた。

やがて貨物列車に積み込まれた六大隊千五百人、行き先はまだ聞いていなかった。中段のない貨車にビッシリ押し込まれた兵、身動きもならなかった。古兵達は大の字に、若い兵は座ったまま眠った。抑留と言ってもまだ首に星が残っていた。何かと言えばビンタを食った。人の温もりなど全く感じたことはなかった。

絶望と怨念を乗せた貨物列車、出発は昭和二十年九月二十五日だった。一路西へ西へ、やがてバイカル湖畔へ。一万トンクラスの汽船が走っていた、海と変わりはなかった。この時点では、ソ連側の受け入れ体制が全くできていなかった。食事は全部飯盒炊さんだった。機関車用の給水塔と燃料用の石炭庫があるだけの荒涼とした野っ原、プラットホームも待合室もない名前だけの駅だった。「この駅に二時間停車するから飯を炊け」との命令、サア大麥、水は機関車へ、薪など全くなし、草茫々の大枯れ野では燃える物は枯れ草だけ、鎌など気の利いた切れ物は全然なかった。千五百人もの飯盒炊さんでは、枯れ草も瞬く間になくなってしまった。

このあたりからだった、上等兵の苛めが酷くなったのは。何をしても遅いと言ってはビンタ、「トロトロしちよる」と言っては叩いた。それも力まかせに、毎日だった。顔は腫れて見る影もなかった。

誰も庇^{かば}ってくれる者はいなかった。無抵抗だから面白かったのか。でも耐えるしかなかった。

さて半煮え飯ができた頃に出発準備、急遽乗車、出発、これらの繰り返しだった。時には機関車に水と燃料だけ補給、この間に兵達は線路脇で用便を済ます。千五百人が一列に並んで、壮観だった。停車時間三十分、これが三日間続いたことがあった。飯を焚くには一時間以上停車しなければ駄目だった。空腹に耐えかねて生米に馬鈴薯^{パレイショ}（ジャガイモ）をかじってみたが、腹の足しにはならなかった。かくしてカラガンダ駅に到着したのは十月十二日だった。一カ月もかかった貨車の旅だった。無銭旅行とは言いながら、苦しい長旅だった。カラガンダ駅前にはもう氷が張っていた。物珍し気に近寄って来た子供達に小石を投石されながら、収容所まで四キロ余り、屠殺場^{とさつじょう}に曳^ひかれゆく小羊のごとくトボトボと歩いた。この収容所の名称「カラガンダ九九地区第六ラーゲル（収容所）分所」とのことだった。ラーゲル所長、陸軍中將ルツキンと聞いた。将校達は反乱防止用にと軍刀の所持が許されていたが、ラーゲルの広い庭で各将兵の所持品一切が没収された。日用品の歯ブラシ、ハサミ、針、落とし紙に至るまで、これには困った。

入所後二週間、栄養失調で旅立つのは大方が若い兵ばかり、中には「お母さん」と一言。私も入院していた。薬もない名ばかりの病舎だった。

この第六ラーゲル、カラガンダでは大きな収容所だった。三重の鉄条網、中心は三メートルのコア板を張り巡らし、四隅にはサーチライトの付いている望楼^{ぼうろう}が設置され、マンドリンを抱えたカンボー

イが四六時中警戒していた。内側の鉄条網に近付くと容赦なく鉄砲弾が飛んで来た。外界から完全に遮断されたソ連製龍宮城だった。現代版浦島太郎というところか。早々と編成された炭鉱組は入坑を開始したようだった。中支以来の下痢が止まらないまま、寿命も限界に近づいたたと覚悟を決めていた十月末、役に立たない病人が百人近く、十一トンダンプに積み込まれた。行き先は療養所とのこと。外は小雪だった。毛皮つきシューパー一枚にくるまって雪道をまっしぐら。朝九時出発、昼食なし、トイレ休憩三回、到着は午後五時、もう真つ暗だった。この療養所は旧関東軍が主力のようだった。ドイツ、チェコ、ルーマニア、日本を加えると四種混合だった。ここで寿命のある者、ない者、生と死の淘汰が始まった。岩塩のスープ、飯盒の蓋にすり切れ一杯の粟粥あわがゆに黒パン一切れ、毎日が同じメニューだった。葉らしきものは何一つ口にしないまま寿命のない者は皆旅立って行く。前世からの約束だったか、夢も希望もなくした若い兵達、痩せ細って灯明の消えるごとく、皆安らかな死だった。毎晩廊下には石のように冷たい屍体しかばねが五つも六つも。この療養所には電気がなかった。夜はカンテラが頼りだった。旅立った兵の亡霊に出逢った者は一人もいなかった。

この療養所で親身になって世話してくれたドイツ人の衛生兵、「希望を捨てるな、生きろ」と励ましてくれた。「ダンケシェン」。ある日、手製の楽器を手に手に十人ばかり、我々の慰問に来てくれた。それはドイツの人達だった。今日はクリスマスとのこと、大正生まれの我々には縁のない言葉だった。流れ出した世界の名曲、最後の曲は「荒城の月」だった。祖国を遠く何千キロ、異国の地で日本の曲

を聞こうとは。並居る兵は皆涙して聞いた。

寿命のあった私は、半年後、元の第六ラーゲルに戻った。昭和二十一年五月だった。翌日より炭鉱勤務、スコップ相手の採炭夫だった。元御用船の火夫だった私には苦にならなかった。以来二年間、ロシア娘のワリーヤとヘルタちゃんに励まされ助けられ、頑張った。粟や稗飯ひえめしで腹いっぱいにはならず、足らないところは水で補いながら。

小さい時より演劇の好きだった私は、ラーゲルの劇団に入れてもらった。昭和二十二年の暮れだった。都合上、炭鉱の三交代をやめ地上勤務となった。建築隊で大工に左官、時には線路工夫、炊事場の釜炊き、冬ともなれば線路の雪除け、零下四〇度にも下がるこのカラガンダ。「生きる、希望を捨てるな」と言ったドイツの衛生兵、ロシア娘の励ましの声を思い出しながら重労働にも耐えた。彼女達やドイツ兵のお蔭だと感謝している。劇団員として二年間、合計四年間病気にもならず、これも寿命だと思った。

ちなみに私の配役は、いつも呑み屋の女将だった。保線作業中に分所の女医さんに出逢うと「マダムナガノー」と言つて肩を叩かれることもあった。

長い苦しい四年の月日が流れたある日。今日から一切の作業は中止する、との命令が出た。どうも日本へ帰れるらしい、さあ収容所はにわかに活気づいた。身辺整理が始まった。私は心残りが一つあった、炭鉱では彼女達の明るい笑顔で励まし勇気づけてくれたワリーヤちゃん達に「ありがとう」と

お礼とお別れが言えないのが。仕事以外では一步も外出できないこの身では仕方のないことだった。苦しかった四年間、この第六分所の衛門を後にしたのは昭和二十四年九月二十七日だった。もう小雪がちらついていた。古兵達の中には中国に戦犯として送られる残留組も相当数いたようだった。一行はカラガンダ駅に集結、他の分所も入れて二千人の梯団ていだんを組んだ。二段に仕切られた貨車五十両、六気筒の機関車二台、二千食一度に炊ける大釜三基の据わった車両一台。三基一度に炊けば六千食だった。往きと帰りでは大違いだった。貨車はゆったりしていて、一人ずつ大の字に寝ることができた。カラガンダ駅を出発したのは昼前だった。往きは三十日、帰りは十九日だった。駅に停車するのは飯あげと機関車の給水と石炭補給の三十分だけだった。明けても暮れても荒涼とした大草原、毎日がうんざりだった。十九日も汽車に乗ったら日本を何周できるだろうか。バイカル湖畔を過ぎナホトカに到着、海を見るのは何年ぶりか、海の見える小高い丘に兵舎があった。順番待ちで一週間、ここでも我々を遊ばせてはおかなかった。いろいろな土方作業が待っていた。合間をみてはアクチブ達による教育及び吊るし上げが始まった。彼らは日本人だったのだろうか。

やがて待ちに待った引揚船の順番が回って来た。その船は永徳丸だった。懐かしの我が祖国日本、舞鶴に上陸できたのは昭和二十四年十一月四日の午後だった。山あり川あり、日本の景色は美しかった。

久しぶりの故郷では「赤」だと言われた。振り返ってみれば、十六歳で故郷を後にしてより八年、

私の青春は「何糞」^{なにぐそ}の二字に尽きるのかもしれない。

【執筆者の紹介】

住所 山口県新南陽市大神

生年月日 大正十三年九月七日生

学歴 昭和十六年三月 徳山実業学校卒業

職歴 昭和十六年三月 神戸市辰馬汽船株式会社 台湾定期貨物船三三〇〇トン機関部員として

乗船

昭和十六年九月 陸軍暁部隊御用船となる 南方方面輸送

昭和十八年三月 二度目のラバウルより帰途、二発の魚雷にて八分で沈没

昭和十八年五月 北方方面輸送御用船天領丸二二〇〇トン乗船

同年 九月 関東軍戦車隊を千島列島に輸送 津軽海峡にて二回衝突 二回目は相手六〇〇

○トン 沈没 四人死亡

同年 十一月 占守島^{シムシュトゥ}にて座礁四十日間

昭和十九年 小樽にてのアッツ島玉砕山崎部隊合同慰霊祭参加（アッツ島へ天領丸が輸送し

ている）

同年 七月 徴兵検査 陸軍となり函館にて下船

同年十二月十日 山口四二連隊入隊 藤部隊要員となる

入 ソ 昭和二十年九月 旧満州よりソ連ブラゴエシチェンスクへ

帰 郷 昭和二十四年十一月五日

現 在 会社勤めを終え一老農として

後 記 二度目の御用船天領丸は、下船後、南方のサイパン島輸送に回り四発の魚雷命中、二分で

沈没、乗組員五十人のうち助かったのは六人とのことだった。

(山口県 小曾根 三郎)